

「底が突き抜けた」時代の歩き方 415

「バカの壁」の中で読み流される「バカの壁」

昨年売れた話題の本10点（数字は出版社による累計）が、今年初めの新聞に次のように発表されていた。

1位『バカの壁』養老孟司、新潮新書＝247万部

2位『トリビアの泉 へえの本』全4巻、フジテレビ トリビア普及委員会、講談社＝209万部

3位『世界の中心で、愛をさけぶ』片山恭一、小学館＝141万部

4位『Deep Love アユの物語』などシリーズ全4巻、Yoshi、スターツ出版＝139万部

5位『マンガ金正日入門』李友情、李英和、飛鳥新社＝53万部

6位『ダイエットSHINGO』香取慎吾、マガジンハウス＝52万部

7位『借りたカネは返すな！』加治将一、八木宏之などシリーズ全3巻、アスキー＝51万部

8位『開放区』木村拓哉、集英社＝50万部

9位『半落ち』横山秀夫、講談社＝34万部

10位『キャッチャー・イン・ザ・ライ』J・D・サゾジャー、村上春樹訳、白水社＝20万部

そこには≪「養老旋風」に尽きた1年≫の見出し記事もあり、いくつかの特徴や傾向を拾いだしてみる。

『バカの壁』は74年の永六輔『大往生』（約230万部、岩波新書）を抜いて、教養系の新書として最多部数を記録し、同じ著者の『養老孟司の＜逆さメガネ＞』（PHP新書）、『まともな人』（中公新書）、『いちばん大事なこと』（集英社新書）もベストセラーになった。『世界の中心で、愛をさけぶ』や『Deep Love』のシリーズもまた、一種の「バカ」本であるが故によく売れ、『Deep Love』は携帯電話のサイトで連載を始め、口コミで女子高生に広まった。≪養老さんが自著を分析するように、「携帯メールという新しい言文一致体」がマーケットで爆発した最初の年として、今年は記憶されるかもしれない。≫

また、大手取次店のトーハン調べによる平成15年の年間ベストセラーは、こうなっている。①バカの壁 ②世界の中心で、愛をさけぶ ③トリビアの泉 へえの本(1)(2)(3)(4) ④べらべらブック2 ⑤開放区 ⑥新・女性抄 ⑦大悟の法 ⑧マンガ金正日入門 ⑨ポケットモンスタービー ポケットモンスターサファイア シナリオクリアBOOK ⑩ダイエットSHINGO

ベストセラーには≪購買意欲をくすぐるタイトル≫が不可欠な時代になっていること

も分析（日出間和貴）されている。『バカの壁』は《本来、書名になじまない「バカ」を堂々と使った点》で、『世界の中心で、愛をさけぶ』は《告白調のセリフを恥じらうことなくつけた点で衝撃的だった。新刊ラッシュが続く中、各出版社は埋もれないタイトル命名に懸命なのだ。》因みに、『世界の中心——』の出版直前までの書名は、「恋するソクラテス」であつたらしい。そこが編集者の手腕の見せ所というわけだが、歌手の佐良直美のかつてのヒット曲『世界は二人のために』が「二人は世界のために」ではないのかと揶揄されたことがあったように、『世界の中心——』が「世界の片隅で、愛をさけぶ」でも「世界の外側で、愛をさけぶ」でもなく、「世界の中心」であるところに若年層に受けたと同時に、「バカ」タイトル故におそらく中高年層には見向きもされなかったにちがいない。

書名がよくても中身がダメなら……というのが一般的な見解であるにしても、膨大な出版冊数の中で目を引くタイトルによって手にしてもらえなければ、元も子もないということになるのだろう。書物も人間と同様に、見栄えが大事になってきたということだ。だから、こういう現象も氾濫してきている。

《昨年10月、呪文のような長いタイトルの本が出版された。小暮修さんの食のエッセー『家で作れないものは外で食べて、店に負けない皿を家で拵えよう。』（平凡社）。28字12個の句読点。雑誌連載時は「今月のもぎたて」。単行本化を機に長大になった。

この書名、昨今の傾向を実によく象徴している。まず、本の主題がそのまま書名になっているため、必然的に長い。次に句読点がちりばめられていること。最後の句点はなくても済むのだが、こうした句読点や感嘆符（！）の類は咲き乱れんばかりだ。とくに健康・病気、ビジネス関連の本の書名に記号はつきもの。各社とも売するための工夫やテクニックを題名に込めている。

蛇足だが、岩波書店の出版物には、この手の技巧はほとんど見られない。》

更に、《出版不況といえど、前向きのタイトルばかりが好まれるわけではない。『「クビ！」論』（梅森浩一著）に代表されるような現実直視のネガティブな書名がビジネス書には多いという。》

『バカの壁』は今年に入ってすぐ300万部を突破し、現在も売れ続けている。著者の養老孟司についてはこの通信でも何度か登場して、協力頂いており、彼の著作であれ、雑誌掲載の文章であれ、目にするものは全部一通り目を通してしているので、彼のファンかと訊かれるなら、そうかもしれないというのが彼の文章に対する私のスタンスである。本来であれば、彼の著作ができるだけ多くの人の目に触れるのを素直に喜んでいいのだが、この爆発的な売れ行き、流行を前にすると、さすがに無邪気に喜ぶ気にはなれない。『バカの壁』の越前クラゲ並みの大繁殖は、日本の思考停滞状況を打破する勢いよりも、まさに「バカの壁」がそこに浮き彫りにされているように思われるからだ。そう、とうとう養老孟司の本まで消費し尽くされるようになったのか、という感慨が先に立つのである。このことはなにより、当の本人が実感していることだと思われる。

養老氏自身、『バカの壁』のバカ売れ現象について、『フォーサイト』（January 04）で次のように分析している。第一は、タイトルである。これには誰も異存はないだろう。《第二は、「語り起こし」の成功である。》「語り起こし」の書き手が『フォーカス』出身のライターであることが幸いした。養老氏が《自分の文章で書いた本は、どうしても堅くなる》が、週刊誌で鍛えられたライターの手が入ることによって、《節や章の区切り方、文章の呼吸》など、《電車で一駅行く間に、読者をひきつけて離さない》文体に換えられたおかげで、《これまで私の本など見向きもしなかった人たちが読んでくれたのであろう》。また、《一つの写真に関して、一つの物語を短く語る》というのは、《まさに解剖学そのものの方法論》であり、養老氏の専門分野であった《解剖学の論文そのもの》が、『フォーカス』ライターが習熟していた《写真週刊誌の構造をしている》ことが、「語り起こし」の作業に違和感を生じさせなかったことも大きい。

《語り起こしの効果》についても強調されている。《私の著書のように、堅い内容に触れるものは、文章がやさしくないと、読者が取り付かない。それなら「やさしい」文章とはなにか。それはいまでは「語り起こし」になる》とあって、ケータイを思い浮かべる。《同じケータイでも、メールのことである。多くの人がメールを利用することは、いまさらいうまでもない。メールの文章は書き言葉である。ところが書いているほうは、ほとんど会話の延長として書く。つまり意識的には会話文だが、脳機能から考えると立派な文字言語なのである。ここがきわめて重要なポイントだと思う。会話のつもりで文章を書くというのは、つまりは新しい言文一致体の創出なのである。現在、一般に普及している文章も、むしろ言文一致体ということになっている。なっているが、それは明治の言文一致、漱石、鴎外、二葉亭四迷の時代に発している。いくらなんでも、百年以上を経過すれば、その文体が変化して当然であろう。メールとケータイのおかげで、われわれは明治以来初めて、あらためて「下からの」言文一致体の創出に立ち会わされているのではないか。「私の考えを若い人の文章で書いてもらったら売れた」という事実の最大の背景を、私はそう解釈している。ちなみに後藤さんはメール文の名手でもある。さらに私は当年にとって66歳、そんなジジイの書くものが250万部も売れるはずがない。しかも、内容はすでに私の既刊著書で基本的には触れたことばかりである。それなら文体を含め、週刊誌と代替可能な新書という軽いスタイル、そうした「パッケージ」の現代性が、『バカの壁』が売れた理由だったとして、それほど見当はずれではあるまい。》

『バカの壁』は自分が書いた本ではない。「私の考えを若い人の文章で書いてもらったら売れた」と養老氏は冷静に分析している。このことは、「若い人の文章で書いてもらったら売れ」るような考えを、養老氏が持っているということでもある。ここでちゃんと自負はしている。どの年長者の考えだからといって、「若い人の文章で書いてもらったら売れ」るわけではないからだ。養老氏がたとえ66歳のジジイであっても、若い人の手が入れば、たちまち流行するような現代に通用する考えを育て上げている、ということが重要なのであろう。《「パッケージの現代性」》ばかりでなく、彼の考えがいま

もウケる現代性をもっているということなのだ。では、そのような現代性とはどういうものなのか。《NHKに代表される「客観報道」》というウソがあまりにも横行しているが故に、人々は『ハリー・ポッター』のように、《安心してアプローチができる》「真っ赤なウソ」というパッケージを欲するようになっていくという。

《こうした「客観」報道の問題は、現代文明共通の問題である。われわれの伝統は芥川龍之介の『藪の中』であり、黒澤明の『羅生門』である。そこに「客観報道」はない。肝心の当事者ですら、むしろ当事者であるからこそ、実状の認識が食い違う。正気であるためには、チェーホフの御者がつぶやくように、「世の中のことはわからぬものですよ」という姿勢を一方で崩さず、といって他方では、最善の仮説をとって、根拠が示されない限りそれを変えないという姿勢が必要なのである。》そして、《正しいか、正しくないかの問題ではない。人々がなにを望み、なにを考えているか、当たり前だが、社会を考えるには、それがもっとも重要なのである。『ハリー・ポッター』の世界的な流行が示しているのは、人々はかならずしも客観報道など、望んでいないということであろう。》

養老孟司は『中央公論』の連載（04・1）でも、自分の本がバカ売れした「流行現象」について語っている。いくらタイトルのせいだの、「パッケージ」の現代性だのと説明したところで、どこかでまだ納得できないのであろう。彼だけではない。彼の文章に慣れ親しんできた私（たち）にも、まだ釈然としないところがある。だから養老氏はここで、かつての紅茶キノコの流行を連想したり、自然科学におけるイナゴ（正しくはサバクトビバッタ）の大発生や、ヤスデの信州での大発生をもちだしたりする。しかし、「水商売は予測できない」といって、こういう。

《私自身は人生は予測できないものだという前提で生きてきたから、長年の勤めも自分の意思でやめた。そういう人間に、予想外に本が売れるという現象が起こるのは、変につじつまがっているような気がする。予測できると思っている人に、予測できないことは起こりにくいはずである。なぜならそういう人は、予測できることしか、しないはずだからである。それなら予測できないことは起こりにくくなり、したがってますます「予測できないことはしない」になっていく。

やっとある結論にたどり着く。いま閉塞状況といわれているのは、万事を予測しようとするからではないか。そこまでなら、それでもいい。だれだって、ある程度の予測で生きているからである。しかしやがてそれが「結果が予測できないことはしない」になり、いつの間にか「してはいけない」になる。そこまでいくと、明らかに行き過ぎである。現代社会はすでにその状況に陥りつつある。》

ここで引用は止めておく。このあと、《「予測する」ことと、「予測できないことはしない」との間に、どんな違いがあるか》と続いて、《なんのことやら、わからない。そう思われるかもしれない。私だって、わかっているわけではない》というところへと行き着くからだ。明快ではないのである。わかりやすく説明しようとしている養老孟司の文章でも、そうすればするほどわかりにくくなっていくことの見本のような文章であ

り、こんな文章を集めても売れないことははっきりと「予測できる」。だから、メール文に堪能な若い人の手で「語り起こし」てもらえば、リニューアルできるということになるのだろう。ここに引用した彼の文章が明快さを欠いていくのは、もともと明快さを欠く要因を孕んでいたからだ。彼が《人生は予測できないものだという前提で生きてきた》ことと、《長年の勤めも自分の意思でやめた》こととの間のつながりのみえにくさにそれは起因しているといつてよい。

おそらく養老氏はここで、東大教授を長年勤めてきた自分の人生は予測できるコースであったが、そこをやめることによって自分の人生は予測できないものになった、といっているのである。予測できるとか予測できないということを、そのような限定された意味合いで念頭に置いているから、予測できると思っている人でも、自分の意思ではないリストラ等によって、いきなり予測できないことのなかに放り込まれるということは、養老氏の考えには入ってこない。本来、予測できるのは自分の視野内の出来事であって、養老氏が自分の意思で勤めをやめたことは、彼の予測の範囲内のことなのだ。予測できないことはいつも自分の視野の外からやってくるから、《予測できると思っている人に、予測できないことは起こりにくい》ということはありえないのである。確かに、《予測できることしか、しない》傾向の人がいるとしても、人生はある意味で予測できないことの連続であるから、リストラのみならず、離婚（別）や不意の災難等がたえず襲ってくる。

こう書きながら、どこかで養老氏の記述と食い違っていきつつあるのを感じるが、予測できないことはしたって仕方がないから、《「結果が予測できないことはしない」になり、いつの間にか「してはいけない」にな》っていくという現代社会の状況は、私のことばでいいかえるなら、予測できないことのなかでどのようにして生きていくか、を考えようとしない現代社会の状況ということになるだろう。ここにみられる養老氏の論理展開は不明快さの典型であり、説得力のなさの露呈であり、彼ほどの明晰な人でも、思考の迷路に踏み入ってしまうことが浮き彫りにされている。こう指摘するのは、彼の思考を疑うためではない。そうではなく、自分の頭で考えだすと、しばしば思考の迷路に踏み入ってしまうことが起こり、自分がどこで迷い込んでしまったのか、そこからどのようにして抜け出していくか、について必死に考えることが思考の育成にとって非常に大事なことを訴えたいためである。

若い編集者の手による「語り起こし」に懸念を感じるのは、そのような思考の右往左往や立ち往生の痕跡を《電車で一駅行く間に、読者をひきつけて離さな》くするために、舗装して消去することによって、《読者にしてみれば、安心してアプローチができる》ように変えられる点である。つまり、そこには活字を視線で追っていく行為や読み込みはあっても、本との対話は内在していない。要するに、読み手の思考への鉤入れは起こりそうにない。『バカの壁』を読んで、読み手の「バカの壁」が少しでも突き崩されるのではなく、逆にますます「バカの壁」が補強されることになってしまうことも考えられるのである。養老氏のいう「バカの壁」とは、自分の知りたくない情報には耳を貸さ

ないという人間の習性のことであり、その「バカの壁」のために我々は人と話が通じ合わなくなっている。

結局のところ、「語り起こし」とは「分かりやすさ」であろう。「分かりやすさ」には平易であることと、明快であることの二つが備わっていなければならないが、世界は「分かりやすい」のだろうか。平易に、明快に説明できるものなのだろうか。難解な内容が平易に、明快に説明できたとして、「分かりやすく」なるのだろうか。それでも、なお難解であるということではないのだろうか。言葉が平易であっても、明快であっても、そのことについて考えていなければ、やはり難解なのではないだろうか。「分かりやすい」ということは、平易で明快に説かれているということ以上に、そのことについて考えるようになるということではないだろうか。養老氏が66歳のジジイの書いたものがバカ売れする筈がないじゃないかというとき、年寄りの考えてきたことが若者の考えていることとフィットする筈がないじゃないか、ということであった。

フィットするためには、間に入って操作を施す仕掛け人が必要となってくる。その操作とは、年寄りの考えを若者に近づけるために、若者に聞かれるような年寄りの考えへと変換することである。つまり、縮小することである。縮小するためには、思い切った省略や変更を取り入れなくてはならない。若者の目に止まるような、彼らの耳に入るような年寄りの考えに変えるのだから、当然もとの年寄りの考えとは異なってくる。年寄りの考えなど若者が見向きする筈もないから、若者が見向きするような操作を施さないかぎり、年寄りの考えが若者に流通することはありえないのだ。それはそうだろうが、ここで気にかかるのは、省略されたり変更されていった内容のことである。省略や変更の部分はもとの考えにとって、致命的と思えるほどの大きなものではないのだろうか。省略され変更された考えはもとの考えと重ね合わすことができるものなのだろうか。改変はもはや当初の年寄りの考えと似ても似つかぬものになってしまっているということはないだろうか。

人間は知りたくないことに対しては、自主的に情報を遮断するようになっていくというその習性を、養老氏は「バカの壁」と呼ぶが、もしかすると彼の著作『バカの壁』は若者に届けられる際に、若者が知りたくない、接したくないという養老氏の考えを意図的に省略したり、改変しているということはないだろうか。つまり、若者にとっての「口当たり」がいいように、改変してはいないだろうか。「バカの壁」を突破するということが、自分が知りたくないことに閉じこもらずに、知りたくないところまで自分を押し広げていくことを意味するなら、若者に『バカの壁』がバカ売れしていくという現象は、若者の知りたくない圏域に『バカの壁』の本が差し込まれて、彼らが自分の知りたくないことと否応なしに向き合わざるをえなくなる方向になれば、『バカの壁』のバカ売れ現象は皮相な事態といわざるをえないのだ。

『フォーサイト』(October 03)で喜文康隆という人が、「『バカの壁』の成功が象徴するもの」と題して、『バカの壁』とP・F・ドラッカーの『ドラッカー名言集・経営の

哲学』を取り上げ、≪『唯脳論』をバブル崩壊の年の1990年に読んで以来、解剖学の最前線で死体と向き合いながら人間の脳と身体の間を考えた養老の著作に、私は魅了されてきた。また、バブル崩壊前後から『会社という概念』『経済人の終わり』『産業人の未来』『マネジメント』などドラッカーの労作に接し、遅れてきたドラッカー主義者を任じてきた。こうした立場から言うならば、著者以外の手が入った、それも明らかに著者よりも劣った人々の手が入った著作は読む価値がない、と考えていた≫が、『バカの壁』のバカ売れや、ドラッカー名言集や『経営の哲学』等のシリーズのベストセラーという事態に接して、社会・経済現象として眺めようとしている。

その中で、人々が『バカの壁』を手にして、≪本当にバカの壁は取り払われたのだろうか≫と疑問を投げかけ、本の中での「その前提となる常識、当たり前のことについてのスタンスがずれているのに、『自分たちは知っている』と思ってしまうのが、そもそもの間違いなのです」「本当は、色々と知らない場面、情報が詰まっているはずなのに、それを見ずに『わかっている』と言う」といった養老氏の文章を引用して、≪『バカの壁』の出版史上に残るヒットは、大衆の養老理解が進んだ結果というよりは、時代の空気に漂う「わかっている」という勘違いの広がりによるものではないのか≫と、シニカルさを提出する。だが注目すべきなのは、次の指摘である。

≪出版を産業として見た場合、『バカの壁』の成功は、きわめて象徴的な出来事である。それは、「養老孟司」というブランドを活用したマーケティング戦略の典型的な成功モデルである。ワンテーマ主義による単行本の雑誌化、ムック化の究極の形だ。養老孟司という脳力と人格とデータの編集であり、翻訳であると言ってもよい。追いつめられた出版業界が生み出した技術革新であり、マーケティング戦略の新たな段階とも言える。≫

情報論の先駆者である梅棹忠夫が「ジャンルの転換」(『情報論ノート』)という言葉を用いて、≪情報論の立場から、メディアのジャンル変換や翻訳自体が創造でありうることを指摘している≫のを受けて、≪養老孟司の『唯脳論』から『バカの壁』にいたる道は、テキストからテキスト、日本語から日本語、特定の個人の著作から個人の著作へのジャンル変換であり、翻訳であることがわかる。それは、新聞や雑誌の編集においては極めて日常的に用いられている手法である≫と述べ、同様の成功例として、経済学者の岩井克人が語りおろしスタイルでまとめた『会社はこれからどうなるのか』が、彼自身の難渋ともいえる以前の著作と比較して売り上げを伸ばしていることに言及する。

≪『ヴェニス商人の資本論』や『貨幣論』、『資本主義を語る』などの一連の著作に比べ全く思想的努力の見えない本を、現役の東大経済学部長が出すことには違和感を覚える。しかし、売れ行きはそれとは全く関係がないらしい≫ことに、筆者はどうやら無然としているのだ。≪第二次大戦後の企業経営の現場に実質的な影響力を持ち、日本の経営者に影響を及ぼした≫ドラッカーにしても、彼の≪深さと偉大さはアンソロジーではわからない。しかし、もはやそんなことは何も関係もないのだと著者自身が思っているらしい。今年は、4冊の『名言集』を出すのだという。／ドラッカーという素材が、出

版の世界においてはジャンルの転換やブランド化における先駆者であることを否定するつもりはない。しかし、晩年にいたってここまであざとい商業主義に走らなかったなら、ドラッカーという存在の歴史的な役割がもっと正当に評価されただろうにと考えるのは私だけだろうか。≫

「養老現象」という事態に直面して、旧世代からのぼやきととまどいがやはり主調音として聞こえてくる。これまでの経験からすれば、この事態は歓迎されざるゆゆしき事態なのであろうか。

≪養老孟司、岩井克人、ドラッカー。三人のヒットに共通するのは、本における「著者」と「編集者」の役割りの分離であり、出版におけるマーケティングの台頭である。それは出版という枠をこえて、雑誌、新聞というジャンルまで巻き込んだ垣根の崩壊と、機能分化の進展を予感させる。

これは、「活字社会のインターネット化」と呼ぶことも出来る。そこでは何よりも、まず著者自身が編集の対象である。「検索」し「カット・アンド・ペースト」して「編集」することは、すべて著者の外部で行なわれる。こうした流れは、ひとたび転がり出すと不可逆性をもって進むだろう。本屋の店頭で『バカの壁』と並んで平積みになるのは『唯脳論』ではなく『養老孟司の＜逆さメガネ＞』（PHP新書）という同種の本である。

養老孟司の『唯脳論』や岩井克人の『不均衡動学の理論』、そしてドラッカーの『会社という概念』。彼らの読みづらい代表作は図書館の書庫にしまいこまれ、書店には、大幅に圧縮し、文体を修正し、マニュアル化し、著者を偶像化した本が並ぶ。

養老は『バカの壁』で、東大教授時代に兼務していた東大出版会理事長の頃のエピソードを語る。「その時に一番売れた本が『知の技法』というタイトルでした。知を得るのにあたかも一定のマニュアルがあるかのようなものが、東大の教養の教科書で出ている。気に入らない……」。

しかし、わたしの眼からみれば『知の技法』と『バカの壁』は同根である。ブランド化の対象が東大という組織か、養老孟司という個人なのかという違いがあるに過ぎない。ドラッカーだけでなく養老孟司も岩井克人も、ここではもはや表現する知性ではなく、偶像＝ブランドなのである。≫

おそらくこの批判は的には当たっているが、的を射ているかどうかはわからない。養老孟司が精魂を傾け、思想的努力を払った『唯脳論』はほとんど見向きもされずに、「語り起こし」というなんの労力も必要としない『バカの壁』のほうはもてはやされる。養老氏は『唯脳論』が手にされないことを慨嘆していただろうか。いや、≪もはやそんなことは何の関係もないのだ≫と思っているような気がする。なぜなら、『バカの壁』がいくらわかりやすい語り口で覆われていようとも、『唯脳論』が書かれなければ『バカの壁』が語り起こされることもなかっただろうからだ。矢印は『バカの壁』から『唯脳論』に向かうことはありえず、このことは間違っても『バカの壁』の読者が『唯脳論』に向かうこともありえないことを意味している。『唯脳論』が『バカの壁』として翻訳され

ていく、そこには「水増し」という言葉が浮かんでくる。読者からすれば、水割りでもしなければ、『唯脳論』なんて読めた代物ではないということなのだ。

なにもかもが「水増し」されていく時代であって、本だけが無縁でいられる筈がない。新たな読者に接近していこうとするなら、どうしても「水増し」が避けられなくなっているということなのだ。時代が要求しているのであれば、時代と付き合っていくために「水増し」もあえて引き受けなくてはならないだろう。それは仕方のないことだ。しかし、ここで問われているのは、「水増し」されていくなかで「水増し」できない核がどこまで含まれているかだろう。つまり、「毒」を確固として見据えていなくてはならない。「水増し」されたなかでの読者との出会いもまた、「水増し」されていくのではなく、「水増し」されようのない核と出会うことのできる通路がどこまで開かれているかであり、その通路のなかでの著者との対話が可能とならなければ、「水増し」は単なる粗悪品にしかならない。

したがって、「水増し」そのものをいくら批判しても始まらない。『バカの壁』が「水増し」できない核を胎んでいるかどうかという、その一点において問われなくてはならない筈だ。もしそのような核が孕まれていなければ、『バカの壁』は多くの人々の「バカの壁」のなかで読まれているだけのことなのだ。『バカの壁』のバカ売れ現象が、「バカの壁」が人々のなかに強く張り巡らされていることをただ単に明らかにするものであったか、それとも各自の「バカの壁」を穿つ欲求にいくらかなりとも駆り立てられているものであるか、そのいずれであるかは、各自が「バカの壁」は自分たちのなかに築かれているだけでなく、自分たちの外の世界にも目にみえたり、みえないかたちで築かれていることが、自分の視界に飛び込んでくるようになるかどうかにかかっているにちがいない。

『バカの壁』のバカ売れはいうまでもなく、米英によるイラク攻撃―占領後混迷の時期と重なっている。このことは、イラクの占領政策に日本がどのようにかかわっていくかが最大に問われているなかで、『バカの壁』がバカ売れしたことを物語っている。もっと突っ込んでいえば、日本全体がどのような「バカの壁」のなかに閉じこめられているかが浮き彫りにされつつあるなかで、『バカの壁』のバカ売れが起こっているのかということだ。福田和也は『フセイン後の新世界秩序』（『諸君』04・2）で、フセイン元大統領の拘束でもはや旧政権の復活が完全に閉ざされることによって、《旧フセイン政権対米英占領当局及びその協力者という構図のなかに回収され》てきたこれまでのテロが、米英vs.抵抗勢力の闘いの意味を帯び、《イラクの未来を問う闘い、イラクがどのような国になるべきか、という問いを巡る闘いとなった》と記して、その闘いのなかで日本がどこにいるか、と問うている。

《イラクの未来は、中東の未来と直結している。ひいては、世界秩序全体の再定義にも関わってきます。

つまりはポスト・フセインのイラクがどのような姿をとるべきか、を巡って熾烈な争いが展開されることになる。それが、今後の国際社会の方向性を決めていく。

私が、現在、深刻に危惧せざるをえないのは、わが国の無力さ、戦略意志の欠如と意識の低さが、これまで以上に厳しい形で露呈してしまうのではないかと、ということです。

実際、国内のメディアから聞こえてくる話は、耳をふさぎたくなるほど、水準の低い話ばかり。

元大統領の拘束は、自衛隊派遣の追い風になるとか、まだまだテロは続くといった茶のみ話。

戦後のイラクがどうあるべきか、という最も重要な話はまったくなされず、聞き飽きた日米同盟賛歌と国連へのノスタルジーだけ。

日本の国益にねざして、どのような新生イラクが望ましいのか、中東秩序が構築されるべきなのか、という主体的、戦略的議論はまったくないのです。

ただ、復興といい、日米同盟重視というばかりで、日本独自の構想をまったく持たずに、自衛隊員の生命を犠牲にしようとしている。

もちろん、日本独自の構想などというものが、どれほど意味があるのか、と問うシニシズムはかなりの説得力があると思います。にもかかわらず、独自の構想をもって、たとえばほんの少しでも、新体制構築に影響力を示そうとしながら派兵するのと、はじめからその努力を放棄しているのでは天と地ほど違う。》

続けて、《第一次世界大戦後、戦勝国の一角、5大国の一つとして日本はベルサイユ講和会議に臨んだ》んだ故事を想起する。《栄誉を持って国際的な大会議にのぞむはじめての機会》に恵まれた《日本代表は、会議の主要議題である、ハプスブルク帝国、ロシア帝国、オスマン・トルコ帝国の解体にともなう新秩序建設について、まったく何の構想ももっていなかった》ために、《意見すらなく、発言はほぼまったく出来なかった。当時イギリス代表団の一員として辣腕をふるったケインズは、同会議の回想のなかで「ジャップたちは何も解らず黙って見ているだけだった」と、かなり侮蔑的なことを記した。福田氏は、中東秩序の構築における戦略構想から世界秩序全体を見渡そうとする視野を全くもたない日本は、自衛隊を派兵しながらも、いままイラクの地で「何も解らず黙って見ているだけ」の光景と重ね合わそうとしているのだ。

日本が張り巡らしてきている『バカの壁』は歴史的なものであり、どこへ踏み出そうとも、『バカの壁』に埋め込まれたままの手足の動作を繰り返している滑稽さで、思わず目頭が熱くなってくるほどだ。元フセイン大統領の拘束によって、イラクの未来にどのようにかわっていくべきかが、より鮮明に映しだされているにもかかわらず、『バカの壁』によって視界が遮られているという問題が、日本全体を覆い尽くしているのである。そんな状況での狂い咲きのような『バカの壁』のバカ売れ現象なのだ。断言してもよいが、少なくとも『バカの壁』を手にかけることによって、その壁に穿たれた小さな穴からイラクの未来につながる世界がみえてこなければ、人々は依然として「バカの壁」の中で呼吸していることを自覚しなくてはならない。

『バカの壁』の第一章「『バカの壁』とは何か」の冒頭の中見出しは、「『話せばわかる』

は大嘘」となっており、《本当は何もわかっていないのに「わかっている」》と安易に思い込んでいる学生が、《また安易に「先生、説明して下さい」と言いに来る》ことについて、こう語る。《言葉による説明、コミュニケーションを否定するわけではない》が、《それだけでは伝えられないこと、理解されないことがたくさんある、というのがわかっていない。そこがわかっていないから、「聞けばわかる」「話せばわかる」と思っている》。しかし、《何でも簡単に「説明」さえすれば全てがわかるように思うのはどこかおかしい、ということがわかっていない。》つまり、《説明したからってわかることばかりじゃない、というのが今の若い人にはわからない。「ビデオを見たからわかる」「一生懸命サッカーを見たからサッカーがどういうものかがわかる」……。わかるというのはいかなるものではない、ということがわかってない。》

養老氏がこう語っていることが「わかる」かどうかは、彼が一体なにを言おうとしているのかが膚に感じられるかどうかによって決まる。「聞けばわかる」「話せばわかる」と思っている人は、「読めばわかる」とも思っている。だから、読んでもわからないことが膨大にある、というのがわかっていない。ただそれを説明する事例として、女性の陣痛の痛みをもちだすのは全く適切ではない。なぜなら、その事例では人の苦痛は本人以外にはわからないし、言葉で伝えることができないで済まされ、具体的な事柄に限定されるからである。言葉による説明を求める者に「わかろうとする」態度が欠如しているのは、「わからない」ことの溝を言葉による説明で埋めようとするからだ。「わからない」ことは言葉で説明されても「わからない」のであり、言葉で説明されてもし「わかる」のなら、彼は「わかる」ことに元から手が届いていたのである。

そのことについてすでに考えているから、言葉による説明でより深くわかってくるのであり、考えていなければ、いくら懇切丁寧に説明したところで「わかる」ことは起こってこない。「わかる」ことが起こるためには、そのことについて普段から考えるという準備をしておかなくてはならない。その準備があつてこそ、言葉による説明が効果を発揮するのであって、準備のないところに説明が育つ筈がない。そのことを端的に示すのが、国連を育成する視点を示さずに、「国連は日本に危機が及んだ時、支援の手は差し伸べない」だろうから、日米同盟を重視すると強調した我がおバカな小泉首相である。彼は『バカの壁』に触れつつ、「話せば分かるというのは嘘だ」と述べ、自分の国会答弁の説明不足や詭弁を棚上げして利用したのだ。

ここに、『バカの壁』がどんな読まれ方をして、「バカの壁」がより一層高く築かれようとしているかの実例が、はっきりとみえてくる。読んでもわからない人にはわからない。読むことや聞くことや話すことは自分の水準の外へ出かけて、相手と出会うことであるのに、自分の水準の中に取り込んで独り相撲に耽っているだけだからだ。しかし、いうまでもないことだが、「話せばわかる」が大嘘はそのことの確認で済ますなら、「バカの壁」への引きこもりでしかなく、大嘘以上のところに踏み込んで思考を練らないかぎり、「バカの壁」を穿つことはできない。

2004年4月9日記